

二人の息子

仙台宮城野教会牧師 齋藤 朗子

聖書 マタイによる福音書21章28~32節

28「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行って働きなさい』と言った。29 兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。30 弟のところへも行って、同じことを言うと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。31 この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。』彼らが「兄の方です」と言うと、イエスは言われた。「はっきり言うておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。32 なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

今日の聖書箇所は、イエス様がエルサレムの神殿の境内でお話になったたとえ話です。まず、このたとえ話がなされた背景をおさえておきたいと思います。

イエス様は、このたとえ話をエルサレムの神殿の境内で語られました。マタイ福音書によれば、この前日に多くの群衆が歓迎する中をイエス様はエルサレムに入っています。群衆はイエス様を「ナザレから出た預言者だ」と考えていました。そして群衆が見守る中で、神殿の境内で商売をしていた人々を追い出す、いわゆる「宮きよめ」をなさいました。また境内では、病や障がいを負った人々を癒されました。翌日、つまりたとえ話をなされた日も、イエス様は神殿におられて、そこで人々を教えておられました(23節)。するとイエス様のもとに祭司長たちや「民の長老たち」(古来は部族長など年配の男性、会堂の世話役や、議会における民間の代表者)が近づいてきて、「あなたは何の権威でこのようなことをするのか。」「誰がその権威を与えたのか」と問いました。あなたは一体なんの権威があって、ここで人々に教えているのか?そして、その権威をあなたに与えたのは一体何者か、というのです。

「あなたに何の権威があるのか、その権威を与えたのは誰か」。この問いは、イエス様にとってこの時がはじめてではありません。エルサレムに来る前から、律法学者やファリサイ派、そしてサドカイ派の人々が同様の問いをイエス様に向けてきました。「あなたには、教え、そして癒し、罪の赦しを与える権威があるというのか、あるとしたら、その権威は誰から与えられたのか?神が与えたと言うならしるしを見せよ」こうイエス様を問い詰める人々の中には、「イエスの力は悪霊からのものだ」という極端な発想を抱く人もいましたが、なんにせよ、律法学者やファリサイ派、サドカイ派の人々の多くは、イエス様の教え・癒し・赦しの宣言にある権威について疑問を抱き、同時に、従来自分たちが「持っている」はずのそれらの権威が挑戦を受けている・脅かされている・奪われそうだと考えました。神殿においての最高の「権威」は、イエス様の権威を問う祭司長です。祭司長もまた、イエス様の宮きよめや教え、癒し、赦しという活動が、自分が祭司として「持っている」権威を脅かすものだと感じています。

自分は、教えることについて、癒しや赦しについて、権威を「持っている」。このことは、律法学者・ファリサイ派・サドカイ派の人々にとって誇るべきことであり、権威というものが持つ力は、彼らの隠された虚栄心や自己承認欲求や支配欲を満足させたり、時には具体的な利益ももたらしてきただろうと思います。

しかし、イエス様はご自身が持つ「権威」を、自分自身を満足させたり自分に利益をもたらすものだとは全く考えておられません。イエス様にとって「権威」は「持っているか否か」よりもまず先に「神のご意思に従い、ただしく行使すべきもの」でした。それゆえイエス様は、常に神の御心に従って、持っておられる権威を教えと、癒しと、赦しの業として行使されました。その教えと業を通して、ご自身が持つ権威が神からのものであることを、自己宣伝せずとも、また何らかの「しるし」によって証明することもなくこの世に証明なされたのでした。

「権威」というものについては、一つ記憶に残ることがあります。私の神学生時代、「私は『権威』にはなりたくないから『先生』とは呼ばないで欲しい」と仰った講師が一人いました。「権威にはなりたくない」という言葉の背景には、この講師の方が持っていた「威張りくさって、人を貶めたり利用したりする人」というイメージがあって、「私はそんな人間にはなりたくない」という決意が込められていたと私は理解しています。あるとき、この講師の授業で提出したレポートが、赤を入れられ、批評され、点数が付けられて私のもとに返ってきました。そのとき私は、「学生のレポートを評価し、点数をつけるのは、〇〇さんがこの分野の権威であり、それをすることが認められ、また求められている立場だからだ」と思いました。だから、私は自分のレポートにつけられた点数に納得しましたし、実際に妥当な点数だし、まだまだ学びが必要だから、あの本を買って読んでみよう、そう思いました。

だから、権威というのは、この世の中でよく見るように、自分自身の利益のために乱用してよいものではなく、正しく行使することで、他者や社会にとって益となる方向性を持っているのが理想ですし、イエス様はまさにご自分の権威をそのように用いられたのです。

そして現実には、イエス様の言葉と業によって、イエス様にある神からの、あるいは神としての権威を認めた人々が大勢いました。31節には徴税人や娼婦たちという言葉が出てきましたが、その他にも、ユダヤ社会では嫌われ蔑まれる職業を持った人々、異邦人、病人や障害者など、総じてユダヤの宗教的権威から「罪びと」と呼ばれた人々たちこそが、イエス様の言葉と業に神を見て、イエス様を神からの預言者かメシアと信じ、悔い改め、神の国の福音を信じたのです。同じように、このような人々こそが、洗礼者ヨハネの活動、神の国の到来を前に悔い改めを迫る言葉に神を感じて、自分の罪を告白して洗礼を受けました。悔い改めとは、これまでした「罪」を反省した、ということ以上のことで、神の国つまり神様のご支配下に我が身を置いたということです。

洗礼者ヨハネは人々の内側を整えて神の国の門前に導き、イエス・キリストは人々を神の国へと招き入れてくださいました。いずれの働きも神の権威によることです。しかし「洗礼者ヨハネは神からの預言者であった」と信じることも明言することもできなかった「ユダヤ宗教界の権威」は、イエスについても神の国に人々を招く救い主とは考えられず、かえってイエスは自分たちの権威を脅かす存在だと考えました。この人々は、この時点で、イエス様の教え、言葉、そして業に神の存在や力を感じることはできなかったのです。

「二人の息子のたとえ」にてでくる弟とは、この人々のことを指しています。弟は「お父さん」にたとえられている神に、本当には関心を持っていません。表面上は聞き分けが良く従順そうにふるまっていますが、神の力、ご意志、望みについて真剣に考えを巡らすことをせず、また、「後で考え直して」ぶどう園に働きに出かけた兄の姿を見ても、何も感じませんでした。より真剣に神のことを考えたのは、表面的には反抗的に思えた「兄」のほうでした。兄に譬えられた人々は、最後の預言者・洗礼者ヨハネの言葉に神の力と意志を感じ、自分の人生に神が関わっておられることを知り、それまでの生き方を悔いました。また、その権威を正しく行使されるイエス様によって罪を赦され、豊かな恵みと聖霊を注がれました。人が過ちを悔いて、神と共に生きること、生き方自体が変えられてゆくこと。私たち人間の身に起きる「奇跡」のなかで、「人が変わる」ことほど大きな神の奇蹟はないのではないのでしょうか。

イエス様はこのたとえ話の終わりで、当時のユダヤの宗教界における「権威ある人々」、人々の多くが、「罪

人こそが悔い改め、神の国に入った」という「奇跡」について無関心であることを指摘しています。「あなたがたは、神からの預言者・洗礼者ヨハネの言葉を聞いた『罪人たち』が悔い改めるという驚くべき『奇跡』を見ても、何も感じず、何も考えず、悔い改めもしなかった」・・・あなたがたは、見るべきものを見ようともしなかったのだ、それは、神への関心が薄いからだ。だからあなたがたは、天の父が力と恵みとをもって、ひとりひとりの人生に確かに関わっておられる事実を本当には信じていることができないでいるし、神の国への道も見失っている。イエス様はそう言っておられるのです。

イエス様がこの世の権威者たちに対してされたこの指摘は、わたしたち一人一人、また教会にとっても無関係なものではありません。私たちは、私たちの人生やこの世界に神様が権威を持って関わってくださっていることにどれほど関心を注いでいるでしょうか。わたしたちは、自分自身や隣人、また社会に神様がなさっておられること、その力と恵みに気が付き、感謝をし、また時に悔い改めることができる、父を思う「兄」のようでありたいと願わずにはおれません。

それと同時に、父がわたしたちとこの世界に対して権威を行使するたった一つの動機が愛と憐れみであることを、私たちは決して忘れずにいたいのです。神が造られたものすべてに注がれる愛と憐れみは、私たちにとっては「弟」のように感じる人や、「弟」のように感じる社会にも注がれています。「弟」に関心を寄せ続け、信じて祈り続け(21:22)、福音と平和を携えて関ってゆくことは、わたしたち「教会」にゆだねられた業なのです。

祈り